

八世紀の半ば頃までに成立したと推測される『釈摩訶衍論』は、「法」（仏・悟り・真理）を生じるための「門」（「因縁」とも言う）を構成する要素として、「機根」（仏教を学ぶ潜在的な能力）と「教法」（教え・教義）の組み合わせを提示する。その際、「上味の妙薬は、当に所対の疾障に由って出現し、能化の教法は定めて所治の機根に由って発起すべし」（巻第一）のごとく、機根を「疾障」、教法を「妙薬」と表現する。すなわち機根と教法の関係を「病・さわり」と「その治療薬」の関係として表現するのである。その出典はおそらく『維摩経』「仏国品第一」における、いわゆる「応病与薬」の記述であるが、それでは、その疾障と妙薬（＝門＝因縁＝応病与薬）は、釈論の中でどのように位置付けられているのだろうか。それは直接的には、十六種の「法」を生じる十六種の「門」（「因縁」として、三十二法門の構成要素となっている。「門」（「因縁」）が最も重要性を帯びて言及されるのは、「不二摩訶衍法」との対比においてである。「不二摩訶衍法」は、分類としては「法」（仏・悟り・真理）に属するものであるが、釈論の主張によれば、それは最高の「法」であり、そしてその至高性を表現する際の比較対象が、まさしく「因縁」（「門」＝機根と教法＝疾障と妙薬）なのである。不二摩訶衍法の至高なる真理性格の指標は、「無因縁」なることであるとされる。機根を離れているが故に（機根という人間的な次元を遙かに超越し、何人も教化対象としないが故に＝いかなる疾障とも無関係なるが故に）、そして教法を離れているが故に（言語・文字という人為的な手段を通じて伝達される教法とは没交渉であるが故に＝いかなる妙薬とも無関係なるが故に）、不二摩訶衍法は至高の真理領域であるとされる。不二摩訶衍法はその独尊（存）性・超越性の故に、「性徳円満海」とも呼称される。そして対照的に、分類としては不二摩訶衍法と同様に「法」（仏・悟り・真理）に属するはずの十六種の法は、劣位なる法として位置付けられるのであるが、その劣位性の指標は、まさしくそれらが「因縁」（「門」＝機根と教法＝疾障と妙薬）から生じたものであるから、とされる。十六種の法は、その人為性・可得性の故に、「修行種因海」とも呼称される以上の検討から、次のような考察が導き出されるのではないか。本来、疾障と妙薬（＝応病与薬）という譬喩は、教条的な原理を振り回すことを避け、個々の人間の具体的現実に着目した教えを説くことを良しとする仏教の、優れた性格を表すもののはずである。しかし、不二摩訶衍法という、人為的努力とは無関係に存立する前代未聞の真理領域に到達したと確信する釈論の作者は、疾障と妙薬を、言わば「既存の、ありきたりな教え」「過去の遺物」等の意味で用いているのではないだろうか。そして『釈摩訶衍論』のみならず、類似の風潮は同時期の唐代仏教界の一部にも見出せると思われる。（1208字）

キーワード：機根と教法、因縁、不二摩訶衍法、